



# 央州寺通信 二月号

菅原祐執 ysobtportland06012017@oregonbuddhisttemple.com

## 「修行」の「行」ってなに？

気づいてみれば二月も終わりに差し掛かっていましたが、まだこの央州寺通信の記事を書いていませんでした。。。今月は少しレイアウトを変更して横書きにしてみました。というのも編集が楽だからです…どうか、私の怠慢さを勘弁してやってください。

さて、今月は「修行」の「行」とは何かとすることをテーマに書かせていただきたいと思えます。

世間一般の宗教の「修行」に対するイメージとは何か善い行いをして、その善い事を行った結果として死後にはよりよい世界に往くというものではなかろうかと思えます。この場合、「行」とは「業」と同意で捉えられており、身（身体による行い）・口（言葉による行い）・意（考えることによる行い）の三業としての捉え方をされています。つまり清らかな（善い）行いをする事が「修行」であると捉えられているのではないのでしょうか。

しかし、そもそも仏教における「行」とは「(さとりへと向かう) 行い」のことであります。その「行」が基となってさとりへと向かうことが出来ないのであれば、それは「行」とは呼べません。つまり、身口意の三業がさとりへと向かう行いとなるのであれば、それは「行」と呼びうるができますが、私達の三業が果たしてさとりへと向かう行いと成り得ているのか？ということです。

ご開山親鸞聖人はとても厳しい内省の人でした。二十年もの間、比叡山において厳しい修行をされたにも関わらず、自分の中をどれだけ見ても自己の三業がさとりへと向かう行いと成り得る要素が一つもなく、かえって自分を迷いの世界へと縛りつけるような業を成しているのが自分であると深く反省していかれました。つまり、自己の力ではこの迷いの世界から抜け出すことに役立つものを何一つもっていないのが自分であるというのが親鸞聖人のご理解でありました。

では、そのような者はさとりへと向かうことが出来ないのかというところではありません。親鸞聖人は迷いの世界から抜け出すものを何一つ持っていない自分であるからこそ阿弥陀如来の本願力によらねばならないと様々な経典やインド・中国・朝鮮・日本などの高僧方の論釈から結論付けていかれました。それが親鸞聖人の主著『顕真実教行証文類』、略称『教行信証』、または『教行証文類』であります。

この『教行証文類』の「行の巻」には『仏説無量寿経』という真実の「教」に説かれている、真実の「行」について示されています。ここで親鸞聖人は「大行とはすなはち

無礙光如来の名を称するなり」と定義されております。なぜ迷いの世界から抜け出すのに役立つものを何一つ持っていない私達が「南無阿弥陀仏」（無礙光如来は阿弥陀仏の別称）と称えることが「大行」と成り得るかという、それは「南無阿弥陀仏」というお名号に私達がさとりへと向かう為に必要なものが全てつまっておるからであります。これは病気の際に薬を摂ることと似ています。薬を飲むという行為を行うのが私だとしても、体調がよくなるのは薬の機能によります。そして、お医者さんが患者に薬をすすめるように、この「南無阿弥陀仏」が間違いないぞと私達にすすめて下さっておられるのがお釈迦様、そして十方の諸仏であります。

この点からいうと、浄土真宗には自己の力による「修行」というものは存在しません。なぜかという、この私がさとりへと向かうのに必要なものは全て阿弥陀如来によって「南無阿弥陀仏」として完成されており、この南無阿弥陀仏が「因（原因）」となって、私達はこの世の縁が尽きる時に、仏とならせていただくという「果（結果）」をいただくからです。

では、普段の生活の中の「行い」がどうでもよいのかということそうではありません。阿弥陀如来のご本願は「必ず救う、われにまかせよ」という言葉であらわされる事がありますが、必ず救われにゃならん存在である私はどのような存在であるのか。それは自己中心性に身を任せて、周りを傷つけ、振り回して生きているような存在であります。今まではこの自己中心性に身を任せるのみであったのが、阿弥陀如来のご本願に出遇うと、「このような私であったからこそ、救わずにはおれない阿弥陀如来さまであったな」と「おかげさまで」という心が芽生えると共に、少しはこの自己中心性を恥じる心、翻そうとする心が芽生えてきます。このようにご本願のみ教えを聞かせていただくことで、「おかげさまで」の心と、「自己中心性を恥じる心」の大切さを学ばせていただく。これが私達の普段の生活の中で重要になっていくのではないのでしょうか。ただし、これが浄土真宗の「修行」ではないことは最後に明確にしておいて終わりとさせていただきます。

それでは、また来月。

合掌

文責・菅原祐軌 央州寺駐在開教使

<三月の予定>

- ・毎週日曜日十時よりお勤めがございます。
- ・日本語法話は二十四日に、「浄土真宗では何故般若心経を唱えないの？」をテーマにお話させていただきます。

皆様お誘いあわせの上お参りください。

